

隠岐さや香著

『科学アカデミーと「有用な科学」ーフォント  
ネルの夢からコンドルセのユートピアへー』

(名古屋大学出版会, 2011年, 528頁)

村澤 昌崇 (広島大学)

科学者は、研究継続の支援を引き出すために、いつの時代においても、スポンサー・パトロン候補者へ向けて、説得のロジックをあの手この手でひねり出さなくてはならないー昨年書評を担当した上山隆大氏の『アカデミッ

『クキャピタリズムを超えて』とは時代も国も異なるが、評者が読了後に抱いた感想は2冊ともに同じであった。ただし、誤解を恐れず2冊の異なる点を挙げるとすれば、『アカデミックキャピタリズムを超えて』において描かれたのは、アメリカにおいて1920年代から今日に至るまで研究者がより好ましいパトロンを求めて政府から市場へと緩やかに鞍替えをしていく様であったのに対し、本書では自然科学系研究者を中心に組織された科学アカデミーが、フランス王政と公共社会に対して、科学の有用性について、ロジックを巧みに替えながら、訴えかけていく様を描いたものとも言える。言い換えれば、前者は科学者がパトロンをすげ替え、後者は科学者が説得の論理をすげ替える（好事家的研究の意義から自然科学の公共への有用性へ）ことにより、科学者の存在意義を確立・存続させる顛末を描いた物語だ、と感じた。

扱う時代も国も異なる2冊の大著ではあるが、共通するような論点を我々に提供してくれるのは、両者ともに90年代から今なお進められ、隠岐氏が「本書が成立した背景」（380頁）として触れている日本の大学諸改革を意識しているからであろうか。新自由主義を基調とした今日の大学改革では、卓越性・有効性そして成果が期待され続けているが、本書を見れば、18世紀のフランスにおいても、まさに同様のことが議論されていたのである。

もちろん、今日の大学改革論とは完全には一致しない。今日的な文脈では、理系・自然科学系が有用な科学としての地位を盤石なものとし、文系諸科学がその対社会的有効性の説明に窮しているのに対し、18世紀のフランスでは、すでに大学にて成立していた神学・法学・医学など先行する諸学問に対し、数学・統計学・化学などの自然科学系は後発であり、研究の場と資金の確保のために奔走していた。まさに立場は逆転していたのである。そのような後発学問としての自然科学系科学者のユートピアとして、大学のような教育機能を持たない純粋な研究組織として構想・組織されたのが「科学アカデミー」であった。

本書はその「科学アカデミー」の歴史を丁寧に辿ったものである。以下本書の概要を評者なりに概観すると、科学アカデミー設立当初は実質的なパトロンであった大臣の管理下にあり、パトロンの交代による嗜好性の変化に運営方針が翻弄されていたが（1章）、17世紀末以降は、研究成果の出版に関してアカデミー同僚による審査・校閲権を得ることにより、国家から独立した運営が可能となった。そして、政治と宗教には関わらないというポリシーの下で、科学の共和国確立の理想が追求されていた

（2章）。

この科学アカデミーの存在理由を世に知らしめる役割を果たしたのが、終身書記という地位であった。一度就任すれば一生その地位に就き、科学の普及と啓蒙の役を担う終身書記には、教育学において馴染みの深いコンドルセも就任していた。この終身書記を通じて、科学アカデミーの基本精神および科学観が実質的に形成される。当初は「科学者の好奇心」が重視されたが、それだけではフランス王権や公共社会はその存在を是認・庇護しない。そこで「有用な科学」つまり自然科学が社会に富をもたらす役に立つ有用なものであることを訴えることで、科学の共和国の存続を図ることになる。特にコンドルセは、すぐには役に立ちそうにない純粋な理論・基礎研究が、長期的視野にたった場合に将来計り知れない効用をもたらしてくれるかもしれないことを、「物理的有用性」として概念化し、各種事例を元に強く主張した（4章）。しかし、科学が公共へ有用であることの強調は、公共社会への貢献と同時に公共政治への関与を強めることになり、政治・宗教へは関与せずという不文律を破ることになっていく（6章）。その後、フランス革命の激動を生き延びることなく、科学アカデミーはその運命を終えることになる。

それにしても本書は、大量の資料を元にした大作にもかかわらず、著者の巧みな文体により読み疲れることなくグイグイ引き込まれる。そしてこの時代のフランスに全くの素人でも、教育学に馴染み深いコンドルセ、そして随時登場するラボアジエ、ラプラス、ラグランジュ、ベイズといった理科の教科書や聞き齧りで見つけた著名人の名前が出てくることにより、つい「にやっ」とさせられながら、彼らの科学者としての立ち位置を同時に深く知ることができ、とても興味をそそる深い書となっている。

さらに本書は、研究者を志す著者の置かれた厳しい時代背景をきっかけとしながらも、時代に翻弄される研究者に関する筆者の思いは、とても禁欲的に「あとがき」にのみ込められ、本文自体は徹底した仮説検証型の実証研究に徹しており、社会史研究のみならず社会科学的研究の王道を行くお手本のような研究である。評者が読了後書評執筆中に同僚から偶然に本書が様々な受賞をしていることを知らされたが、それも大いに納得・感服できる。この点について、同様に賞に輝きながらも、上山氏の『アカデミックキャピタリズムを超えて』は、「大学人は市場の中で生きるしかない」という結論先にありきであり、その結論に誘導するような資料やインタビュー

の解釈をしている感がある。最近も、『中央公論』2012年2月号において、文系も大学の公的な資金を使って得た成果の一部を、著書という形で市場の取引に使っていることを挙げて、文系も理系も公共性と市場との関係の原理は同じであり、市場の中で生きるしかないことを強調している。しかし彼の言う文系の市場などは、理系の市場とそれに連動する研究者の金銭欲の規模に比べれば、市場と言えるかどうかとも疑わしい微々たるものでしかないことを無視した極論であり、実証研究から自然に導かれた論とは言い難く、是認し難いものである。やや隠岐氏の著書に関する書評の域を超えてしまうが、隠岐氏の著作は、上山氏の著作とは好対照な実証研究だと言える。

強いて要望を述べるのであれば、類似の他者である伝統的な大学の研究者や、アカデミー・フランセーズとの関係をもう少し丁寧に描写してほしいところではあったが、筆者はおそらく研究の視野を横に広げるよりも、科学アカデミーを徹底的に深く掘り下げることを選択したのだろうし、同時代の背景に関する評者の知識・勉強不足でもあるので、高望みではあるだろう。

それにしても、本書を読んで、18世紀フランスでも現代でも、好奇心に基づいた好事家的研究は、同じ研究者によってさえも、「役に立たない」と切り捨てられるという事実を突きつけられ憂鬱になるばかりであるが、そのような研究も包摂しながら、研究者を守ってくれる現代の終身書記の出現を願わずにはいられない。